

越

後

春

日

山

城

を

再

現

す

謙信の居城春日山のまほろしの部分を新資料をもとに堆理し模型によつて復元！

桜

井

成

広

(青山学院大学名誉教授)

屋形図の発見 上杉謙信は理想主義の権化で一生を毘沙門天のように強く清く生き通した英雄だったために、古来敬愛する人々が全般的に多い。そしてその本拠であつた春日山城址は比較的によく保存され、訪れる人が絶えないのであるが、しかしその居館の詳細や日常の生活振りは甚だ不明である。

城址の地図は多く流布しているが、それは廃城後九十三年を経た元禄十五年（一七〇二）の図が最も古らしく、いずれも中に描かれている建物の姿は信用できず、部将邸の主の名も図によつて異り、堀家時代に出来たはずの監物堀がどの図にも記入されている。したがつて、まして謙信時代の居館の図が残つている

とは多分誰も知らなかつたであろう。ところが昨春、作家江崎俊平氏から国会図書館にそうちした図が所蔵されていると教えられ、驚いて調べて見ると果して存在して、しかも明治年間から所蔵されていることが分つた。

今まで知らずにいたのは、書名目録の題名が誤っていたからであろうかと思われる。

書名目録には単に「春日山城図」とあるので、誰しも上記の世上に流布している図としか考へないからわざわざ借出して見る人の少いのが自然であろう。図には城中図とあるので、もしカタログにその通りに載つていたら私も見ずにはいなかつたに相違ない。

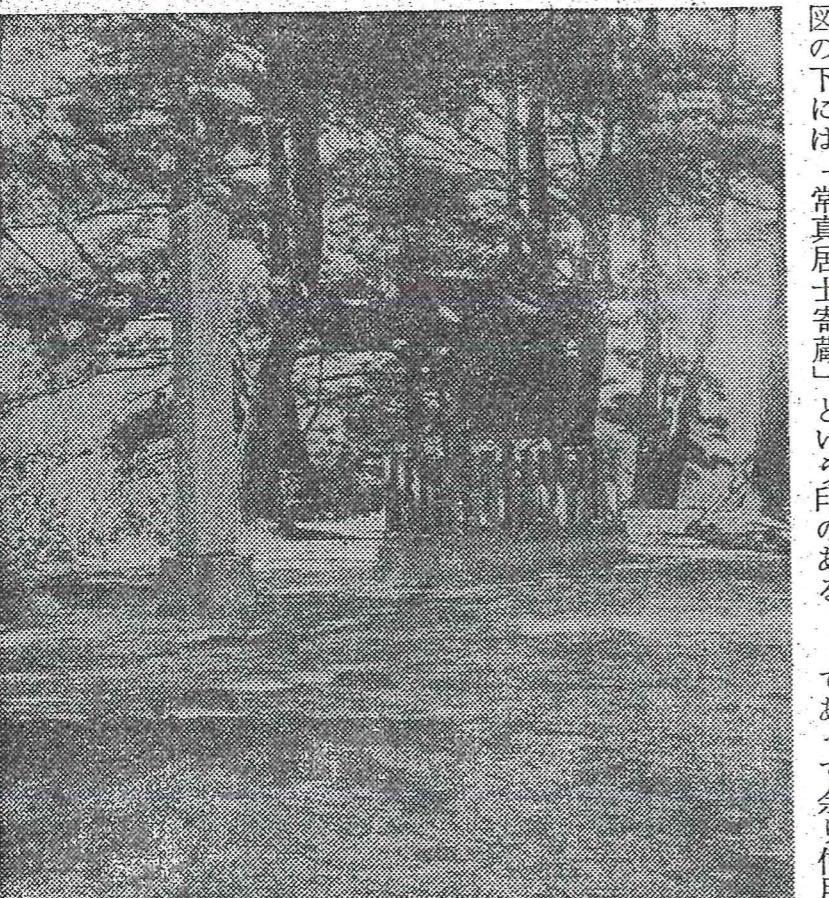
同じような例は他にもあつて、東京上野の「原図上杉侯臣益田甚右衛門政恒秘図今茲文化十五戌寅夏四月十三日政恒訪東都我藩邸」は左下に、

「原図上杉侯臣益田甚右衛門政恒秘図今茲文化十五戌寅夏四月十三日政恒訪東都我藩邸」は左下に、

即ち此図見レ贈レ余因重撰之為珍裏云。奥島景就」と記入され、右下には文政五年（一八二二）九月二十三日と同年十月十九日の伝写を経た事が記入されており、その写した人の名に「要門末守」とあつて上杉流軍学者の家に伝來した図であることを示している。この屋形図の下には「常真居士寄藏」という印のある

春日山全城の図が貼り付けてあり、それには明治十七年三月三田越鉢という人が写した旨が記入されているが、書体から見て屋形図も同じ人の写したものと思われる。その全城の図は謙信自画と題してあるが、記入されている部将名には、謙信時代だけの柿崎和泉と景勝時代だけの直江山城、藤田能登の名が書いてあって余り信用できない。

この珍しい屋形図が後世の写しであるとすると、故址を発掘して柱跡を発見するより他に、図の真偽を確かめる方法がない。図には右端に「東」と書入れてあり、それに従うと上方の「鉢ケ嶺ツツキ」即ち春日山城本丸方面は北々東に当り、南方にも山を描いてあるから南に尾根が続いていることになる。又西南は「此下タ三丈下リテ二十丈余ノ堤アリ



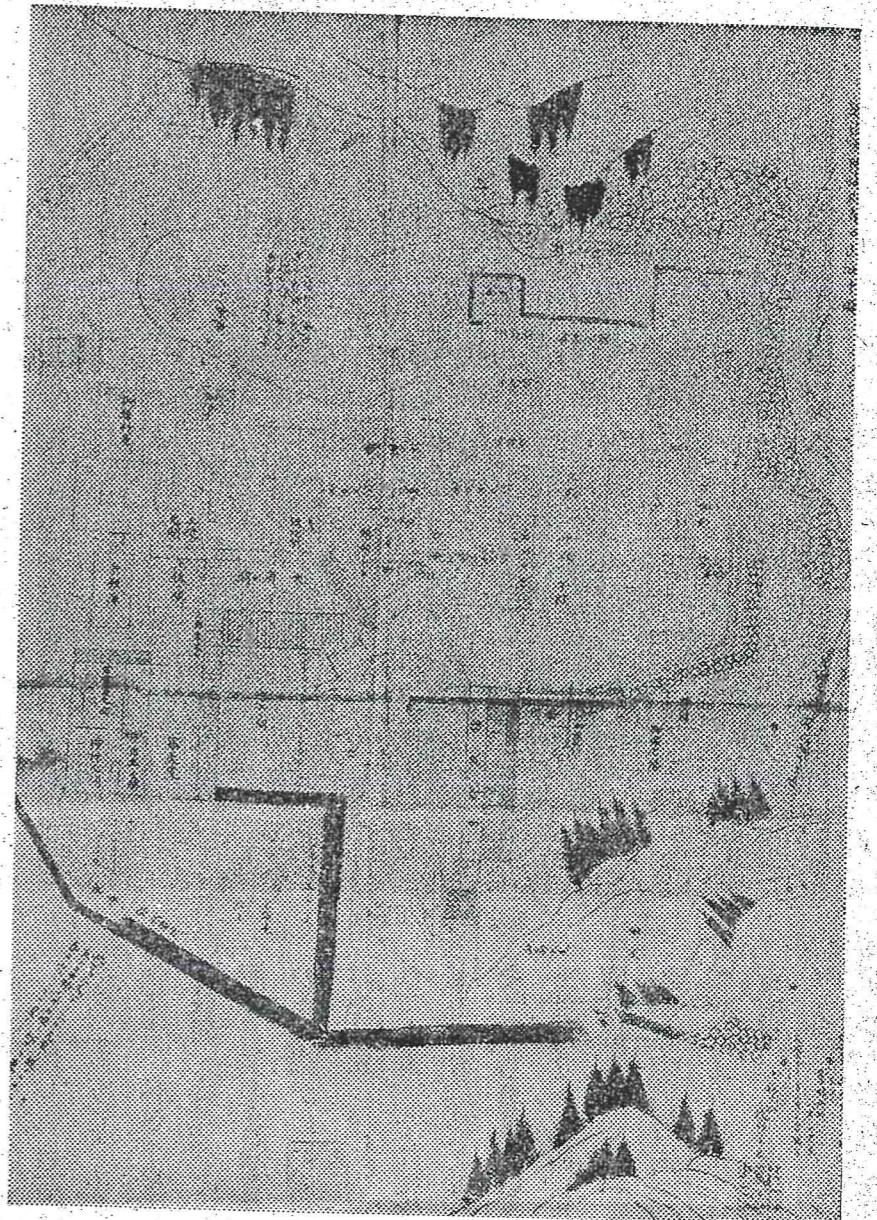
現在の春日山城址

其西ニ直江カ曲輪七十五間ノ地アリ是ヨリ春日山ヘシノヒノ道アリ」とあるので西方は谷であつたことになる。そこで春日山城の故址について考えると、本丸南隣にある「景勝屋敷」という土地がその記載と一致すると思われる。他に東北方山麓の「御屋敷」と「右近畠」及び春日山神社の社地も、城主の屋形の位置として相応しい地形であるが、共に上の記載に一致しない点がある。

故址

そこで昨秋郷土史家室岡博氏、春日

山城の主といわれる程城址に精通している春日旅館の主人大島氏その他の有志と共に、勝屋敷は土地の崩壊が甚しくて入ることができず、草をわけて行くとマムシがいたりするので、余儀なく柿崎屋敷址という標示のある煙から見上げ、宋代の染付白磁かと思われる物の破片を拾つただけで下山した。しかし先年上越城郭研究会の方々が実測された図によつて大体の地形は判つており、それによると景勝屋敷は東端の東西二〇メートル、南北七〇メートルの狭小な平地を残して西方大部分は崩れ落ち、現在は段々畠になつてゐる。ま



長い間国会図書館の書庫に眠っていた春日山城中図

中世城郭の特質をよく備え、最初は直江津にあつた守護上杉氏の居館にとつての要害城であつたのが、謙信の父長尾為景が居城として山麓に居館を営み城下町を造つた。所謂根吉屋式城郭であつて城址では地形上「御屋敷」

「右近畠」と呼ばれる一区は、戦国大名の居館に相応しい場所である。その土地は径一丁位あつて甲府の武田氏の屋形と同じく、一段高い右近畠は妻子の住む大奥に当り、もし謙信が春日山城で生れたという説が真実なら、

或は其所が誕生地かと推測されるのである。そこで近頃この御屋敷が謙信時代にもその居館となつた場所かと考えられているのである。

細道があつたが、それも今では崩壊して通れなくなつてゐるということであった。

恐らくその道は図の西側に春日山への忍びの道と書いてあるものではなかろうか、従つてもし今後発掘して発見出来そうな物は、屋形東端の諸建築の掘立柱の穴だけであろうか

と呼ばれていた。そして実城は本丸を意味するので山上のはずであり、中城はその通りの地名が山の中腹上記の御屋敷から上方千貫門址付近に残つてゐるのだから、謙信の邸はやはり山上にあつたと考えられるのである。

「御実城様」と呼ばれ養子景勝は「御中城様」と呼ばれていた。そして実城は本丸を意味するので山上のはずであり、中城はその通りの地名が山の中腹上記の御屋敷から上方千貫門址付近に残つてゐるのだから、謙信の邸はやはり山上にあつたと考えられるのである。

が、しかし謙信時代の古文献によると謙信はかけて高田市文化財保護委員会によつて精密な調査が行われ、伊藤正一氏によつてその結果が公表されている。要約するとこの山城は

積重ねがあり、ことに昭和四十年から翌年にかけて高田市文化財保護委員会によつて精密な調査が行われ、伊藤正一氏によつてその結果が公表されている。要約するとこの山城は

# 近代的邪馬台國

足で書いた本

宮野 薫著 一、〇〇〇円(送料共)

「春日山城要害普請等不可有ニ油断一事。城留守中捷事」の中に、

「春日山城要害普請等不可有ニ油断一事。城

はなく、実城と呼ばるべき本城地区は大手の「景勝屋敷」から北の「門曲輪」または千貫門址と言われるあたりまでである。そして武将の居館の建つほどの広さをもつ平地はやはり「景勝屋敷」以外はないのである。

ここで謙信自筆の消息その他によつて、当時の春日山城を研究してみると、英雄謙信は信玄と同じように居城の防備に余り力を入れていなことが分る。しかし遠く出陣している間に本拠を襲われる場合を考え、用心だけは十分にするよう命じている。

まず永禄三年(一五六〇)末、謙信が始めて関東に出陣した時に留守の衆に与えた「在陣留守中捷事」の中に、

「府内春日火之用心無ニ油断」其心懸専一候。大門、大手門、何も急度可<sup>まうと</sup>申付<sup>おつて</sup>候。普請以下是又愈不可<sup>まうと</sup>ニ油断<sup>中略</sup>追而門番以下急度可<sup>まうと</sup>申付<sup>おつて</sup>候。」

とあつて永禄年中によく城普請が行わ

る。邪馬台國ほど近代的な国家は珍らしい。そのまま現代の國家を見る如しである。女王・ひみこ。総理・いきめ。国防相・みまき。文教相・なかて、伊都国駐屯の千名近い派遣軍。市場の交換率を定め、一部を税として収納する大倭。克明に国内を巡察する刺史。支配下の七ヶ国。朝鮮海峡の対馬。壹岐。鉢で魚を捕る末盧。駐屯軍のいた伊都。経済的大國奴(な)。網で魚を捕る不彌(ふみ)。列島改造の発進地、殺馬。そして邪馬台國の位置は?足で見ればそれは明白である。邪馬台國に関する疑問はこの一書で解明出来る。

古代文化研究所  
山口県長門市俵山局  
電話 083744-3759-42

翌天正二年には総堀

を浚い、墨壁を修補し

た事が『武徳編年集成』

に載つており、そのこ

ろ城下町を保護する総

堀まで完備していたの

である。城中の建築物

が甚だ乏しいが、山上

に倉庫があつて有事の

時に備えて麓の代物を

そこへ移すことを命じ

た文書がある。それは

永禄七年三月四日付で

関東の前橋城から書送

つたもので「しものく

らにいれさせ候代物と

もいつれをも実城に置

くへく候」とあり、鉢ヶ峰を枕に討死する覚

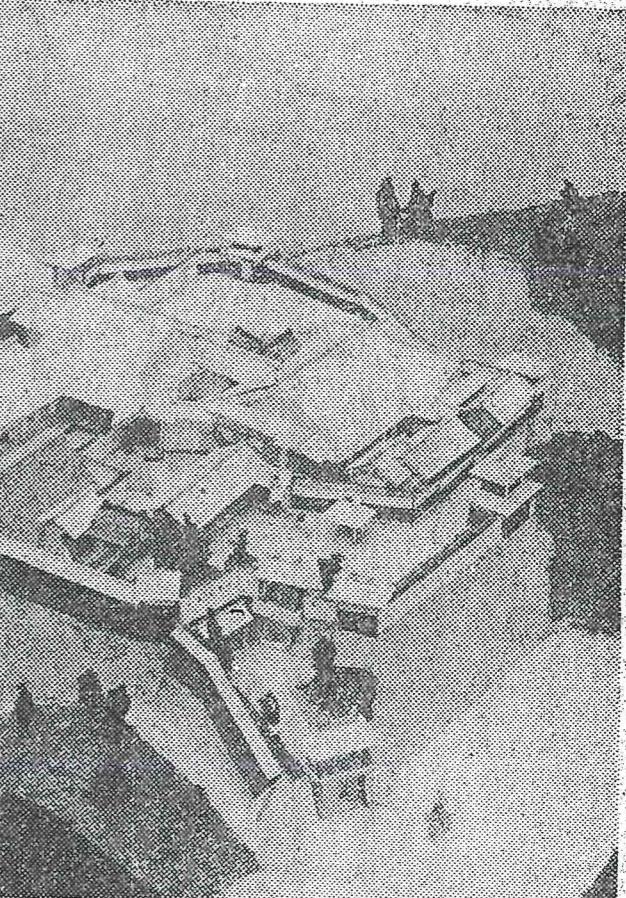
悟なら少数の兵でも堅固に籠城できると書い

てある。当時謙信は信玄や北条氏康と対陣し

ていたから、代物というのは味方の大名から

取つた人質であろうか。

春日山城址は謙信時代のままではないかも



春日山城中上杉謙信屋形の推定復元模型（百分の一）東南面

知らない。謙信の在城は天文十七年（一五四八）十九歳で城主となつてから天正六年（一五七八）逝去まで二十年、其後を景勝が嗣い

で二十年、つづいて慶長三年（一五九八）堀秀

島城に移り春日山は廃城となつた。したがつ

て景勝が慶長二年に増築した記録もあり、堀

氏の時代にも多少の変更があつたかも知れな

い。ことに屋形図を見ると、表御殿と起居の

用の中奥すなわち居間御殿とはあるが、女性

の住む大奥がない。これは謙信一代の住居で

あつて、女房衆の居た景勝時代や堀家時代には

は、この邸は用いられることが少なかつたの

ではあるまいかと思われる。

謙信の屋形を含めて山上の狭小な「御天」

すなわち俗に本丸や天守台と呼ばれている曲

輪その他山頂は本城であるが、謙信時代には

上記の如く実城と呼んだ。この語は新田義貞

の本国上野や義貞が守護であつた越後の方言

ではなかつたかと思われる。その語原を推測

するに、南朝の皇居は始め吉野山の実城院で

あつた。義貞戦死の後、孫の貞氏は、征東將

軍宗良親王の御子国良親王を奉じて新田の金

山城に居たので、その城は金山実城と呼ばれ、

金山城の武士は実城衆と呼ばれていた。それは吉野の行宮に准じての呼称で、現在も金山城の山上に実城という字が残つてゐる。

そして新田氏の子孫は越後にも広まり、謙

太鼓」という離子が残つてゐる。上野国でも

本丸を実城と呼んだ例は、永禄四年謙信が小

田原城攻めから引揚げて、松山城か何所かに

馬を留めていた時、前橋城に居た近衛前嗣が

謙信に送つた書状に

「人質、成田、箕輪（長

野氏）などともミシや

う（実城）へまいり番

をし候へ、政虎（即ち

謙信）るすの事わざら

に申つくべきよし申を

かれ候よし申候て」云

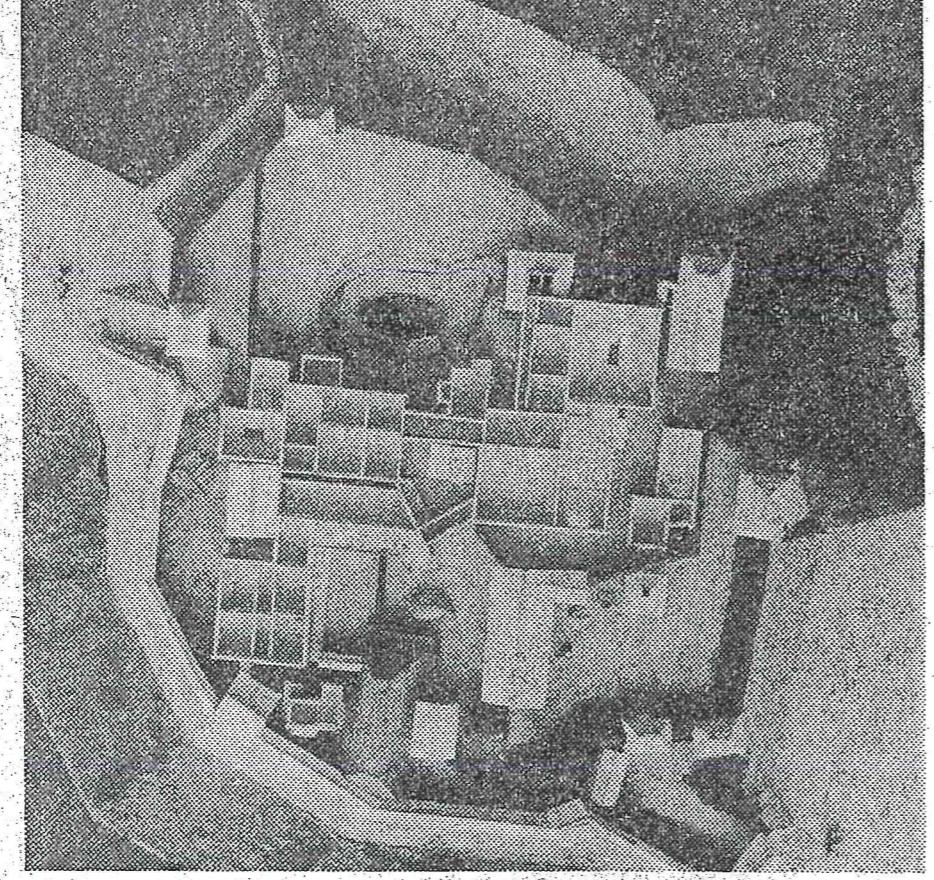
云の語がある。これは前橋城が関東に於ける

謙信の根拠地であり、そこへ関東諸大名の人

質を集めて置いたことを示す文書である。

謙信の消息には実城の他に「二の曲輪」「三の曲輪」の文字があるが、それが現在の何所

模型 日本の城郭史学を、科学として外国のそれに劣らないものにしようとする、信の未亡人で謙信の姉に当る仙洞院と、當時十歳だった遺児景勝が移り住んだ所である。現在天守台の東下の二ノ丸と呼ばれている小平地は清水も湧いていて小さい屋形が造れそ  
うな土地であるが、それに続く帶曲輪に相当するものは見当らない。もし下に続くとしたら現在の三の丸であろう。「三の曲輪」は不明である。



真上から見た春日山城中上杉謙信屋形の復元模型

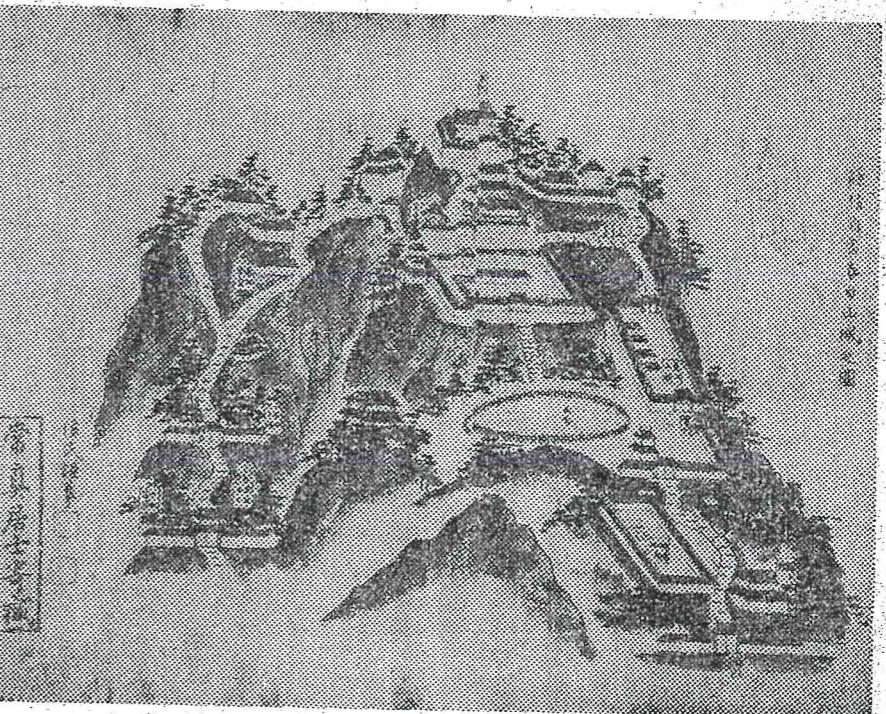
いる名城の研究は多くの作業仮説を立てて、それを史跡の発掘や古文献によつて検討しつつ真実の姿の発見に迫つて行かなければならない。そこの場合は推定復元模型を製作して見ることは論理学上の間接実験であつて、できる限りオーセンティク（精确）な寸法の物を造らなければならぬのである。

そこで春日山城中の謙信屋形を、まず屋形図の通りに平面立面とも百分の一の大きさに作成して見た（前ページ写真）。すると色々新たに気付く点が出て来た。

まず屋根の軒の出を半間に見て見たところ、主屋とその周囲の不識庵や作事場等の屋根が衝突してしまふ。そこで軒の出を切りつめたり、高さを変更したりしてようやく納めたが、やはり周囲の空地が狭すぎる。また表門と御殿との間に堤があり、高さ二丈敷二丈と記入されているが、敷を二丈にすると不識庵が西方へ押しやられて窮屈になる。従つてこの図はもし真実の物であれば周囲をかなり狭く描い流し出すると水が橋の上五尺になるというのも不合理である。

戸ヲヌケハ鶴ノ間ノ井ヘ水ヲ引橋ノ上水五尺 そこで模型では水底まで池の深さ二丈とし、中に長九間の堤を設けて六尺の橋を架し、それを上と書いてあると見、大池の水を井戸へ流すと水面が橋の下五尺になると解釈して見たのである。

鶴の間の井戸というのは邸の西半の表御殿と東半の居間御殿との間の空地に書き込まれており、間<sup>ま</sup>というのは坪という意味と解される。つまり建物に囲まれた小空地である。その井戸に記されている文字は「深サ七丈余。三丈下リ五尺四寸ニシテ堤迄抜穴アリ水出ス」とあって大池の底より一丈低い所に抜穴の口があつて水が出るように仕組まれていたわけである。ただ「五尺四寸ニシテ」という語が分らないが、抜穴の口の高さであろうか。各地の城に抜穴が残つているが、いずれ



春日山城の全体図。壮大な山城をしのばせる

殿北裏の壁は大分厚く、油壁か何かで北方の丘陵上から屋内を射撃されないように造られているものと解釈できるから、北の尾根はさに飛び下りるのを防ぐためには空堀でなくてはなるまいと思われた。

景勝屋敷の標高は一六一メートルでその北の小丘は五メートル高く、さらに三メートル高く井戸曲輪があり、その上の天守台は標高一七九メートルである。現在景勝屋敷の北に空堀があり、湧水があつて湿地となつていてから、邸内に図にあるような周囲二十間余の大池も設けることが出来たはずである。南の尾根は北から次第に低くなっているから邸内の方が高いか、または西の堤道がめぐつておのずから空堀をなしていたであろう。現状では御成街道の通つている所である。京都から

将軍の使者などが訪れて来る時は、良港だつた郷津から上陸してこの道を通つて春日山城に到つたもので、現在も密林の中に細々と跡が残つてゐる。

この図の謎は抜穴である。北寄に大池が描かれ、その中に「堤長二十間余」「水底二丈下ニ長九間広六尺ノ橋アリ此下ニ永門アリ此

背負わせる。

昆沙門堂は山上にあつて昆沙門天の像を祀り、謙信が修行をし冥想を深め、また諸臣を招いて誓約をしたりする堂であるが、天賜の白洲へ下り牀几に腰かけると先手の大将が毘沙門の旗を真先に持出す。図には中門の外、唐門の前に「御旗台」があり、「御備之場」

であることが分る。現在の景勝屋敷という畠地を西の段々畑になつて斜面まで加えて計ると、四十間四方位となつてこの屋敷が納まるのに適當である。また屋形図は南北に尾根つづきの山を描いてあるが、その山と邸との境が崖か空堀かを明示していない。しかし御

台所から遠いから或は抜穴の口で、忍者が出た後は必要によつては、水を注いで行方を分らなくする工夫であったかと思われる。

見よう。

布施秀治氏の『上杉謙信伝』は史料の正確な点で定評があるが、出陣の式作法を次のように伝えている。「謙信中門の廊より出て徒歩にてまず不識庵に入り毘沙門天を拝して戦勝を祈る。了つて神前に献じた花水を各々腰筒（水刀）に汲む、これを五沽水といふ。図には中門の南に白洲があり、堀を距てて不識庵があり、それには板縁があつて裏に闕<sup>あ</sup>伽棚かと思われる入込が記されており、神前献花の伝と一致している。つづいて謙信は白洲へ下り牀几に腰かけると先手の大将が毘沙門の旗を真先に持出す。図には中門の外、

唐門の前に「御旗台」があり、「御備之場」

はその広場であろう。ついで二番大将が山内

学問も原料®  
カステラ銀装®  
銀装

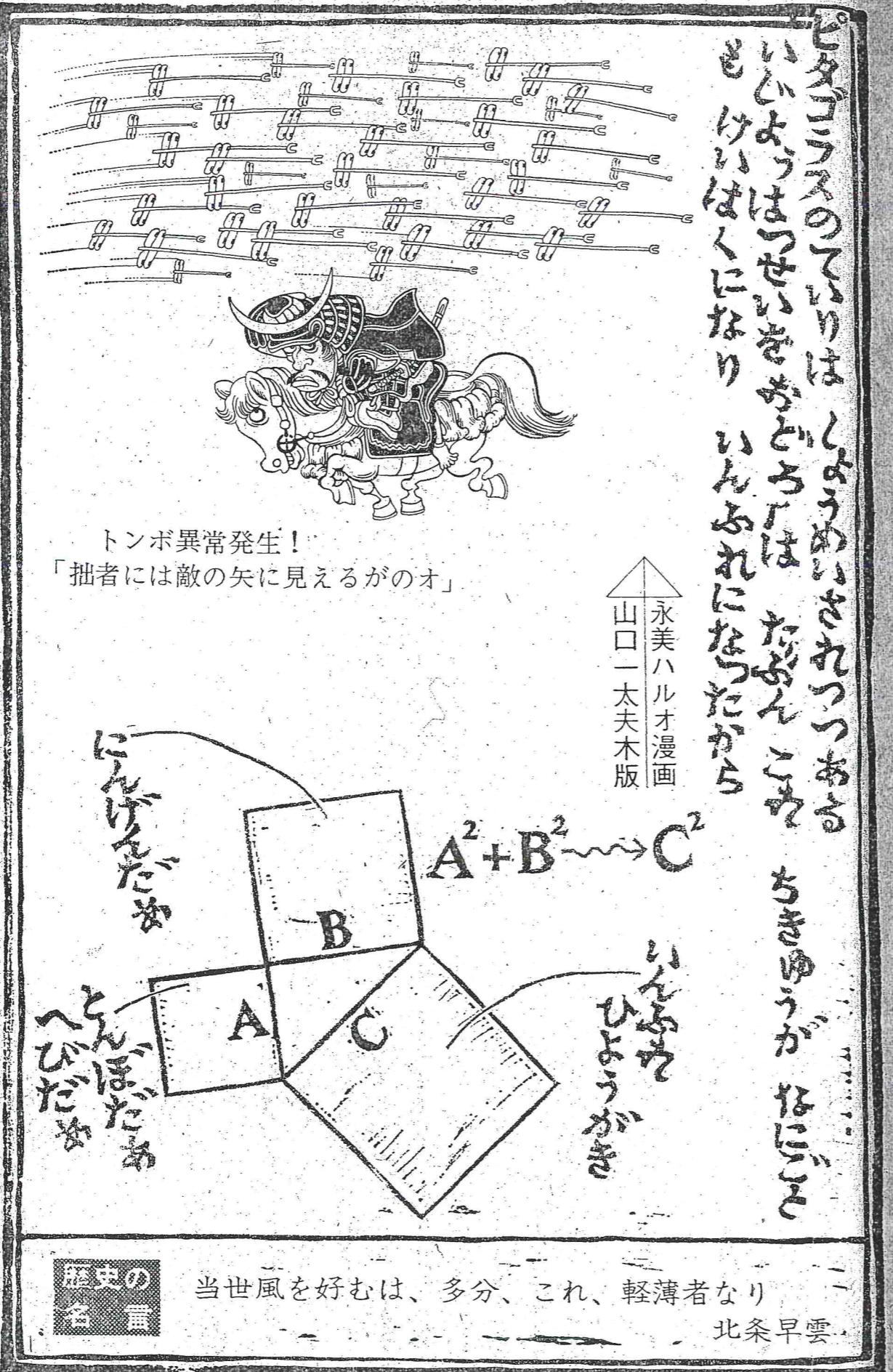
楯無に對して誓つた事は、違背を許されない家例であつた。長篠の戦にも功臣宿将皆決戦に反対したが、勝頼が御旗楯無も照覽あれと誓つて出撃を命じたので、必敗の戦場に向つたのであつた。

の途中にあつて米沢の上杉神社所蔵の春日山城図にはそれに「千貫門」と記入してある。千貫というのは大坂城の千貫矢倉の例に従えば、千貫出しても占領したい有力な門という意味であろうか。

子が安置されていたのではあるまいか。

『北越軍談』は江戸時代初期の軍記物であつて多少の誤伝もあるが、比較的に信用できる史料と認められている。その中の記事によると城中に橋亭という建物があり、納涼の宴を

( 82 )



城内で毘沙門堂及び不識庵と並んで重要な意味をもつ建物に、看經所がある。図中にそれを探すと鶴ノ間の井戸と大池の間にある日光殿がそれに当るかと思われる。西に張出して小さな「御仏間」、北に張出して「軍書棚」がある。謙信は座禅を毘沙門堂または看經所で行つたが、ここに大般若の太刀が納めてあつたといい、また看經所の仏前に供えた願文が数通残つてゐる。いざれも敵の罪悪を指摘し、自己の清廉潔白を述べて仏敵を亡ぼすことを祈つたものであるが、その仏の名が阿弥陀如来、日天將軍、地藏等九つも列挙されている。

催して上杉憲政や村上義清を慰めたり、石垣勾当という琵琶法師を招いて雪夜の徒然を慰めたり、又部将を招集して戦略を練つたといふ。恐らくそれは天守の源流をなす庭園建築兼矢倉の一例で図上に求めれば東端の花頭窓を有する二階矢倉に当るか、又上越城郭研究会によつて発掘出土した天守台址の三間に四間の建物であつたかも知れない。また寝所の庭にはこれから出陣攻囲すべき敵の城の模型を小姓に命じて砂で造らせ作戦を練り「日影を移して」すなわち長時間倦むことを知らなかつたといふ。

また上洛中武野紹鷗に茶の湯を習つたと伝えられるが、図の下端に貼り足した全城図の本丸近くに茶屋があるのも見落せない。或は此所で松籟に心を澄ましつつ、紹鷗一流の田舎間四畳半自在鍵の茶室で、侘茶ノ湯の禅味に浸ることもあつたであらう。

三